

佐藤佐太郎

長沢
今西
幹一
一作
著

佐藤佐太郎

長沢一作／今西幹一 著

短歌シリーズ・人と作品 18

長澤一作（ながさわ・いっさく）

大正15年静岡県に生れる。昭和18年より佐藤佐太郎に師事。昭和20年「歩道」創刊に参加。歩道短歌会幹事。現代歌人協会理事。日本文芸家協会々員。昭和34年歌集『松心火』刊行。翌35年同歌集により現代歌人協会賞受賞。昭和43年歌集『條雲』刊行。昭和44年合同歌集『現代』に参加。昭和45年短歌研究賞受賞。昭和46年『佐藤佐太郎の短歌』刊行。昭和50年歌集『雪境』自選歌集『秋雷』刊行。昭和52年『鑑賞斎藤茂吉の秀歌』刊行。昭和55年歌集『歴年』刊行。

今西幹一（いまにし・かんいち）

大阪市南区生。少年期を本籍地の三重県・飯高町にて送る。高校（大阪・高津）時代作歌を始め、「実験」に加入。発行所を自宅に置く。以後、「現代短歌」「鴉」等の歌誌に所属するも、作歌を中断。

昭和35年、関西学院大学文学部日本文学科卒業。教員生活を経て、昭和40年、同大学大学院に入学。修士、博士課程修了。大阪電気通信大学、関西学院大学講師を経て、昭和51年より、山梨英和短期大学助教授。近代短歌（特に写生主義短歌）専攻。

短歌シリーズ 18
人と作品

佐藤佐太郎

発行所
株式会社 桜楓社
東京都千代田区猿樂町二一八—十三
電話 二九五—八七七一（代）
振替 東京六一—一八〇二〇

著者
今西 幹一
及川 篤二
共信社印刷所

昭和五十五年十二月二十五日
昭和五十六年一月五日
定価 一八〇〇円
初版印刷
初版発行

序

現代短歌のなかで佐藤佐太郎の存在は極めて大きい。五十余年の歌業は斎藤茂吉を継承し、その「写真」はさらに新を展いて、間断ない歩みをいまに続けている。

最初の歌集『歩道』の憂愁をはらんだ鋭利清新な感覚はアラragiの新風として世に迎えられた。『帰潮』に代表される壮年中期は戦後を負ってきびしい緊張にかがやいている。そういう時期を経て、その後の『群丘』から『天眼』にいたる境界はまさに「おもむくままにおもむく」(「作歌真」)悠々たる姿であり、豊かで深い円熟に向っているよう。

一方には『純粹短歌論』を始めとするあまたの歌論があり、師斎藤茂吉秀歌のすぐれた鑑賞があり、自歌自註がある。それらは作歌の根本を明らかにし、表現の機微にわたっている。

その著『及辰園往来』のなかに蘇東坡を評した魏淳甫の「少にして鋭、壮にして肆、老にして嚴」の言葉が出て来る。そして蘇東坡に親しみ、傾倒久しい佐藤佐太郎にもしいってよければこの言葉がまさにふさわしい。

ともあれ、現歌壇のさまざまな傾向にかかわりなく、これほど自らの信条を貫いて来た歌人は稀であろう。そして逆に現歌壇に磁極の放つような重い照射をあたえつづけている。そうし

て佐藤佐太郎の歌のゆたかな味わい、その輝きと響きは時間を超えて、いよいよ広い層の人々に滲透し、親しまれてゆくだろう。

どうも始めから主観的な文章になってしまったが、本書の研究と鑑賞がはたしてそういう佐藤佐太郎の真髓をどこまで伝ええているだろうか。その一端に触れただけでもいい。意の達しなかったところ、あるいは不備もあるかと思われるが、力をつくして執筆したことでお許し願いたい。

一昨年『佐藤佐太郎全歌集』が現代歌人協会の第一回短歌大賞を受けたとき、その受賞の謝辞のなかで、これから人のやらなかった事が出来るような気がする、という言葉があった。控え目な言葉だったが、佐藤佐太郎の気魄を受けとめたのは私だけではなかった筈である。そしてそれは『天眼』とそれ以後の現在の歌境に顕われつつあるだろう。

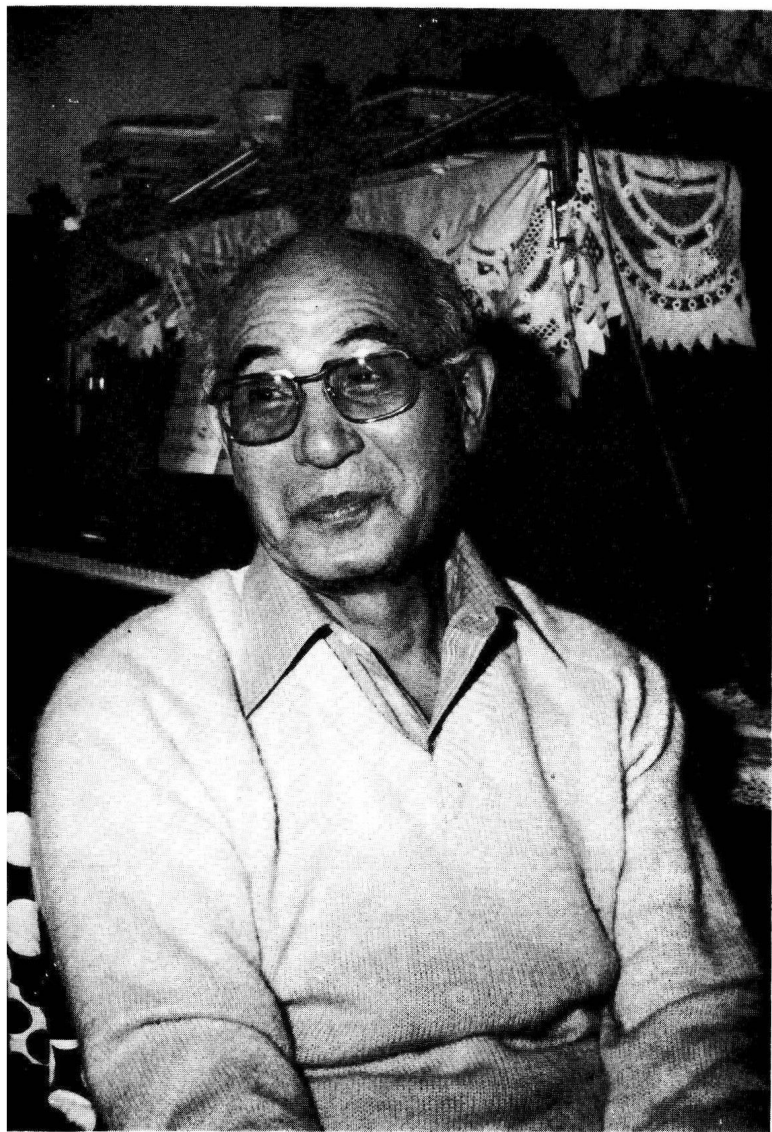
昨年古稀を迎えられたが、ますます健やかに大樹のごとき齢を重ねられんことを希ってやまない。

なお、「作家研究編」「参考文献」「略年譜」は今西幹一、「秀歌鑑賞編」「作品選」は長澤一作が担当した。

昭和五十五年歳晚

長澤 一作

今西 幹一



佐藤佐太郎近影



終戦後、青山の自宅付近にて



友人と一昭和27年3月、新宿にて一

(前列左より佐太郎、橋本徳寿、後列左より鹿見島寿蔵、長谷川銀作、木俣修)



茂吉の三筋町歌碑の除幕式の日



書齋にて（昭和30年代）



カナディアンロッキーをバックにして



孫と自宅でのひととき



古稀のお祝いの日に家族と

目

次

序

作家研究編

前章 歌人佐藤佐太郎の誕生

- 一、アララギの新進として……………九
 - 二、昭和期短歌の「新風」として……………一九
 - 三、佐藤佐太郎短歌の成立―『軽風』『歩道』の世界……………四四
- 後章 佐藤佐太郎の短歌の世界

- 一、佐藤佐太郎の歌集と歌風の展開……………九二
- 二、佐藤佐太郎短歌の蕩播期―歌集『しろたへ』『立房』時代……………九五
- 三、佐藤佐太郎短歌の確立期―『帰潮』の世界……………一三五
- 四、佐藤佐太郎短歌の転回・拡幅期―『地表』『群丘』期……………一六〇
- 五、佐藤佐太郎短歌の完熟期―『冬木』『形影』期……………一七九
- 六、佐藤佐太郎短歌の老境悟達期―『開冬』『天眼』期……………一九二

秀歌鑑賞編

野分すぎし草野を夕べ	(二〇五)	とどまらぬ春のはやちや	(三三)
山のべの小豆畑に	(二〇六)	つるし置く塩鱒ありて	(三四)
暮方にわが歩み来し	(二〇七)	ものの香もなく冷えわたる	(三五)
舗道には何も通らぬ	(二〇八)	あぢさゐの藍のつゆけき	(三六)
薄明のわが意識にて	(二〇九)	四十歳になりし褌衣は	(三七)
電車にて酒店加六に	(二一〇)	戦はそこにあるかと	(三八)
飾窓の紅き花らは	(二一一)	おもおもとして寒き夜に	(三九)
萌えたちし樺並木の	(二一二)	椎の葉にながき一聯の	(四〇)
店頭に小豆大角豆など	(二一三)	うつしみの人皆さむき	(四一)
とどまらぬ時としおもひ	(二一四)	あかあかと朝焼したる	(四二)
地下道を人群れてゆく	(二一五)	貧しさに耐へつつ生きて	(四三)
めざめしはなま暖き	(二一六)	踏切を貨車すぐるとき	(四四)
道のはてに盛りあがりたる	(二一七)	秋分の日の電車にて	(四五)
探照燈の幅ある光	(二一八)	銀行のとぎす扉に	(四六)
静かなるしろき光は	(二一九)	わが来たる浜の離宮の	(四七)
ことごとくしづかになりし	(二二〇)	秋彼岸すぎて今日ふる	(四八)
風はかく清くも吹くか	(二二一)	人間はみな柔かに	(四九)
霜どけのいまだ凍らぬ	(二二二)	掌を人に見しむる	(五〇)

苦しみを内に持てれば	(三四)	冬の日といへど一日は	(六三)
灯を消して吾は思ひき	(三四)	午後三時すぎてゆくてに	(六三)
ほこりあげて春のはやちの	(四三)	空わたり来る鶴のむれ	(六四)
颯風のあらぶるなかに	(四四)	白鳥の群とびたちて	(六五)
しづかなる象とおもふ	(四五)	限りなき砂のつづきに	(六六)
北上の山塊に無数の	(四六)	地下道を出で来つるとき	(六七)
能登の海ひた荒れし日は	(四七)	街ゆきて売れるをみれば	(六八)
いのちある物のあはれは	(四八)	憂なくわが日々はあれ	(六九)
埋立てて成りたる広き	(四九)	生れたるばかりにて危険を	(七〇)
窓そとに日に輝きて	(五〇)	おもむろにからだ現はれて	(七一)
平炉より鑄鍋にたぎちある	(五一)	あたたかき冬至の一日	(七二)
季の移りおもむろにして	(五二)	鹹き血のにはひのなかに	(七三)
屋根のうへに働く人が	(五三)	冬山の青岸渡寺の	(七四)
白藤の花にむらがる	(五四)	夕光のなかにまぶしく	(七五)
栗の花おぼろに見ゆる	(五五)	あるときは幼き者を	(七六)
陸果つる海の光に	(五六)	時じくの筍のびし	(七七)
浅間より砂礫ふるとき	(五七)	海の湧く音よもすがら	(七八)
潮いぶきたつにかあらん	(五八)	やや遠き光となりて	(七九)
みづからのいびき聞きつつ	(五九)	沼のべの村のしづかさ	(八〇)
氷塊のせめぐ隆起は	(六〇)	菊の花ひでて香にたつ	(八一)
まのあたり浄土曼陀羅に	(六一)	山茶花はゆふべの雲に	(八二)

妻の知る媼なぎさの	(二八三)	われの生に逢ふ晩春の	(二九四)
二十年魚の目老いず	(二八四)	もてあそび難き余齡と	(二九五)
天は老い地は荒れたりと	(二八五)	衰へて足おぼつかぬ	(二九六)
紅葉の山のしづくに	(二八六)	灯の暗き昼のホテルに	(二九七)
魚くひてなまぐさき身を	(二八七)	わが顔に夜空の星の	(二九八)
しろたへの帳うつるは	(二八八)	青天となりし午すぎ	(二九九)
冬ごもる蜂のごとくに	(二八九)	憩ひつつ見る道のうへ	(三〇〇)
夜となりてともなふ雷の	(二九〇)	蛇崩の道の桜は	(三〇一)
いちはやく若葉となれる	(二九一)	山茶花の咲くべくなりて	(三〇二)
収めたる冬野をみつ	(二九二)	喜ばず蔑まず見よ	(三〇三)
生死夢の境は何か	(二九三)	きはまれる青天はうれひ	(三〇四)

作品選 三〇五

著作・参考文献 三二七

佐藤佐太郎略年譜 三二六

短歌索引 三三五

装画 佐藤多持

作家研究編

